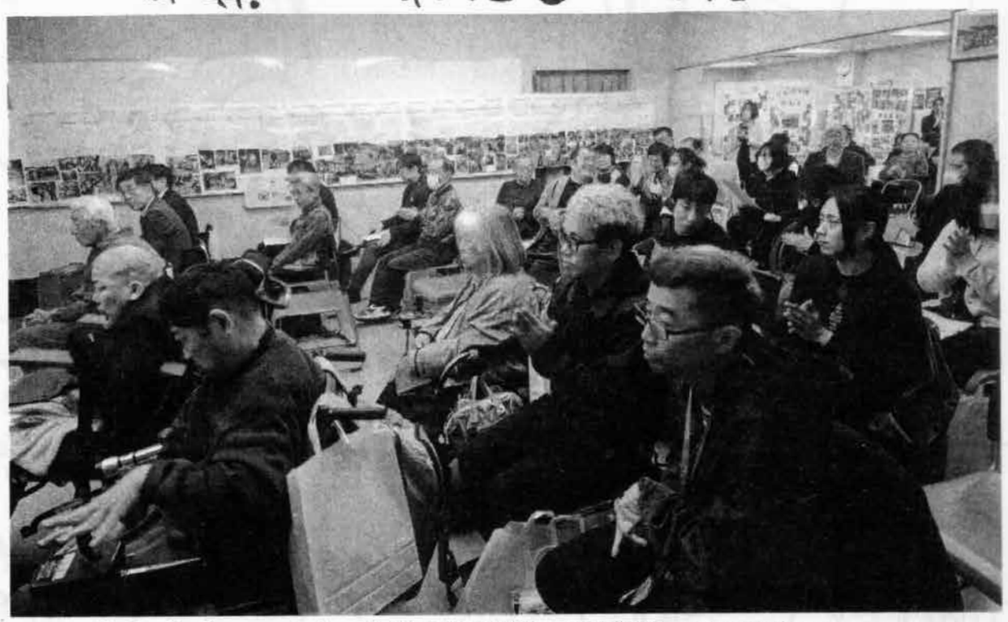
２０２５年３月１日　毎月１回１日発行　通巻５５８号
１９８４年１０月４日　第三種郵便物認可　頒価　２００円

# 月刊 わらじ 3月号

## 特集　わたしの3月

二〇二五年三月一日　毎月一回一日発行　通巻五五八号
一九八四年十月四日　第三種郵便物認可　頒価二〇〇円



いまや村中が「福祉ゾーン」になった観のある越谷市恩間新田。その端緒となった生活ホームオエヴィスが事業を廃止し、2月23日に有志主催による「さよならオエヴィスの集い」が開かれた。35年の歴史の末には虐待事件も起こり、状況の激変に対し的確な対処をして来れなかったことを、原点に遡りふりかえり、法人ぐるみで新たな一歩を踏み出した。その中で、生活ホーム事業は、木造一軒家で修復も難しいオエヴィスを廃止し、くらしセンターべしみの2階にある生活ホームもんてんのみにする方向も定まった。当日は元入居者、介助者、世話人、家族等40数人で、県東部地域初の５人の共同住居ははちきれそうな雰囲気だった。オエヴィスの大家で入居者だった故新坂幸子さんの好物だったすいとんがふるまわれ、悲喜こもごもの思い出を語り合った。

そして、写真は3月8日にくらしセンターべしみで開催された「社会福祉法人つぐみ共生会30周年記念のつどい」。地元はもちろん県内各地の障害者自立・共生をすすめる諸団体代表や研究者、地元行政関係者にもご参加いただき、メッセージ、シンポ、永年協力者への花束贈呈、懇親会等を行った。

シンポでの「ありがとうオエヴィス」と題したわらじの会藤崎代表の話。「山下さんが高校のとまり来るか、おれはうんと言って、それからオエヴィスのくらし」。障害児の高校入学問題で教育局廊下リレー泊り込みに参加し、介助を確保した思い出。今日の来場者達にもつながる縁。

高橋儀平さんからのメッセージ。「カタチあるべしみの計画に参加したこと」が「本格的に国や埼玉県の仕事に関わるきっかけになったといっても過言ではありません。」行政に要望し交渉する、しかしそれだけでなく、提言し参画もする。いまも私たちの基本的スタンスでありたい。

小さな新聞 3月号
THE CHISANA SHINBUN 2025年
第00502号(月刊)わらじの会 25
発行所 わらじの会

祝 30周年
社会福祉法人
つぐみ共生会

# さよならオエヴィス 一人一人の物語編んで

2月23日、「さよならオエヴィスの集い」が、生活ホーム事業を廃止し約35年の歴史に幕を閉じた旧「生活ホームオエヴィス」で、有志の呼びかけにより開かれ、たくさんの人々が集まった。参加者一人一人が物語を語った。故・新坂姉妹の分家として始まったオエヴィスは、生活ホームに至るまでの前史がある。制度も何もなかったころ、とりあえず近所の主婦や学生たちに呼びかけ、「自立生活演習」をやった。介助に入ってくれた人たちが仕事や家事や学業をどのようにやりくりして来てくれたのかを障害者本人が聴きとることで、どうやっていったら介助を受けながら地域生活を持続できるだろうかと考えあうことだった。制度の前にそんな時代があったのだ。35年間の後半では、社会状況も変わり、入居者も変わって、悩みながら歩んできた。これらを財産としてこれからも生活は続く。

## わらじ短信

◆藤崎稔さん(春日部市)ようやく借家き まり契約できそう。

◆山下浩志さん(春日部市)三月十五日越谷市立図書館・読書会で、「支援から共生へ～障害者福祉の新たなステージ」をテーマに講演。

◆佐藤良子さん(越谷市)CHIへ転居して半年。食欲もでてきて元気になってきました。

◆平岩泉さん(春日部市)三月五日、おとくなりになりました。

◆土田良幸さん、障害者生活支援センターえん、退職。

会報の「克己絵日記」がここのところ「写真日記」になっている。2023、7月号から時々「写真日記」が混ざり始め、最近は毎号。盲・聾・下肢麻痺の克己画伯は、網膜色素変性症で、若いころはわずかながら視えていた。20歳を過ぎて家の中から外へ三輪車イスを駆使して街の中へ出ていき、そこであったトラブルや行き違い、出来事などを週一回橋本家で開かれる手話会のメンバーに報告するためのツールとして“絵”を使った。それが「克己絵日記」の始まりだった。多分、2年ぐらい前から視力や視野がかなり落ちたと思われる。買い物リストの”指令書”の文字も”判じ文”のようになっている。

克己画伯は、介助者たちと行く“絵日記の旅”や、金曜日朝に行っているご近所や知己の人に“会報配り”をしている情景を介助者に写真に撮らせている。だから写真の構図はすべて今でいう自撮り。絵と同じ。膨大な写真の中から“写真日記”の写真を選び出している。ピンポイントで視える？日記を作る時は、介助者に誰が写っているかを聞いたりしているからやっぱり視えてない？画伯は何も言わないが。